

スピヴァクにおける読解の「二重性」という戦略について

—デリダのマラルメ、フロイトの古層—⁽¹⁾

檜垣 立哉*

On the Reading Strategy of "Duality" in Spivak Derrida's Mallarmé and Freud's ancient strata

HIGAKI Tatsuya

論文要旨

本稿は、ポスト・コロニアル・スタディーズの基本文献でありながら、きわめて読解が困難なスピヴァクの『サバルタンは語ることができるか』を、とりわけスピヴァクの『グラマトロジーについて』英訳への「序文」、およびデリダの『散種』所収の「二重の会」を援用し、読解の「二重性」という、デリダからスピヴァクがひきついだ戦略の実践をみながら解説していくものである。スピヴァクのテキストや事象の解説は、つねに「二重」に、そしてその「二重性」が多重化されるように描かれており、それはスピヴァクの分析にも、そして分析される対象にも該当する。最後に、ある種の「宙づり」の「決定不可能性」におかれるこうした読解が、スピヴァクにとって重要な「読解的实践」であることを提示する。

キーワード ポスト・コロニアル、スピヴァク、デリダ、サバルタン、二重性

Abstract

This paper focuses on a way of reading of Spivak's *Can the Subaltern Speak?* which is one of the basic texts for post-colonial studies, but is extremely difficult to read. Especially invoking the Preface of Spivak's English translation for *Of Grammatology*, and Derrida's Double séance in *La dissémination*, we decipher it while looking at the practice of the "duality" of reading, the strategy that Spivak inherited from Derrida. Spivak's decipherment of texts and events is always depicted as "double" and the "duality" is multiplexed, which applies to both Spivak's analysis and the subject being analyzed. Finally, I will show that this "suspension" of "undecidability" is crucial for Spivak's "reading practice".

Keywords: post-colonialism, G. C. Spivak, J. Derrida, subaltern, duality

* 大阪大学人間科学研究科 ; higaki.tatsuya.hus@osaka-u.ac.jp

1. はじめに スピヴァクの読みにくさについて

ガヤトリ・C・スピヴァクの『サバルタンは語るができるか』(以下『サバルタン』と表記)は、すでに学問領域として確立された「ポスト・コロニアル・スタディーズ」の基本文献とされる。だが、それ自身として読んで読みやすいものではない。この文章自身がもとは講演原稿であり、そこでスピヴァクが基本概念の説明抜きに議論をはじめていることに加え、スピヴァクの英語が、同時期にクィア・スタディーズを築きあげたジュディス・バトラーと並び、フランス現代思想の影響を受けた悪文と評される読解の困難さをもつことも、その理由にあげられよう。これらの点については、『サバルタン』の上村忠男訳(みすず書房)に対し、その翻訳について英文学者宮原一成が疑義を呈し、第11版において訳者が批判をうけいれ相当の訂正をおこなっていること、しかしながら当の宮原も、そもそもスピヴァクの英語自身が誤読を誘いかねないと指摘していることなどを考慮すべきだろう⁽²⁾。さらに内容面においても、『サバルタン』の最後でスピヴァクは「サバルタンは語るができない」と断言し、本文中で再三繰り返される「サバルタンは語るができるか」という問いへの答えをあたえているのに対し、のちに大著『ポストコロニアル理性批判』の第三章「歴史」にこの論考をくみこむ際には、スピヴァクの名を高めたこの断言は「得策ではない」と記され(Spivak 1999:308)、「語るができるか」という問いは開かれたままになっている。スピヴァクが「何を」いいたかったのかは、謎に包まれることになる。

しかし、この書物が読解に困難を極めることについては、その方法論と内容面の双方を考えると、致し方ないものがあるともいえる。そもそも題名である「サバルタン」自身が、イタリアのマルクス主義者グラムシによる、階級闘争論からヘゲモニー論への展開(もとはそこでのイタリアの南北問題がテーマである)に関連した独自の用語であり、それをスピヴァクはとインド(ベンガル)の「女性」たちに適応するのだが、そうした説明は一切なされない⁽³⁾。またスピヴァクは序文にあたる箇所ではアルチュセールが「否定」(*dénégation*)の哲学の方法をとるとしながらも⁽⁴⁾、それがどのようなものかをのべることはない(アルチュセールの名は何度かあげられるものの、ま

まった解説がなされることはない)。本文の議論は、冒頭からミシェル・フーコーとジル・ドゥルーズの「知識人と権力」という「対談」がとりあげられ、彼らが表象＝ルプレザンタシオンをただ「表象」としてしか解釈しないことが激しく批判される。だがそれが何故なのかは、スピヴァクがカール・マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』に依拠して、ルプレザンタシオンに、Darstellung（一般的な表象）と Vertreten（政治的な権力構造としての代表・代理性）という「二重性」を読みこむ戦略が明確になるまでは判然としない。さらにインドにおけるサバルタン・スタディーズのグループ、とりわけラナジット・グハなどに批判の刃が向けられるが、テキストを丹念にたどっても、そうした議論は背景の知識がないとなかなか理解しがたいだろう⁶⁾。そのうえ、本稿で以下に詳述するように、ジャック・デリダの『散種』に所収されたフランス一九世紀の象徴派詩人ステファヌ・マラルメの「黙劇」をテーマとする「二重の会」をもちいた議論を、あたかも自明の前提のように引用する。マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』の解釈においては、ラカンを想定した「父の名」が強調され、ピエール・マシュレーの名もみいだされる。そして講演の後半三分の一において提示される、インドにおけるサティという寡婦殉死の儀礼をあつかう場面では、フランソワ・リオタールの *différend* 概念が提示され、ジクムント・フロイトの「子供が叩かれる」が解釈される。こうした政治哲学やフランス現代思想、さらにはインドのサバルタン・スタディーズの論脈に通じていないと、このテキストにとりかかることはそもそも難しい。

また、『サバルタン』に先だって、スピヴァク自身が若くしてデリダの『グラマトロジーについて』の英訳をなし、それに対して一冊の本になるほど膨大な「序文」（以下『グラマトロジーについて』英語版「序文」を「序文」と表記）を、デリダの身振りをそのまま真似て——ミメーシスはまた『散種』におけるテーマでもある——記していることを、内容面でも形式面でも理解している必要がある。ポール・ド・マンや、ド・マンに招へいされたデリダの講義に出席していたとはいえ、スピヴァクのこうした博覧強記や才媛ぶりには驚嘆するよりほかはない。だがそれは『サバルタン』の読解にとっておおきな問題ではない。

私は、『サバルタン』が「かくも読みにくい」のは、スピヴァクの語ろうとする方法論と内容が密接にむすびついているがゆえであると考え。そ

もそも区分をなしにくいこの点について、最初に少し論じておこう。

2. 二重に論じること

『サバルタン』では、全編にわたって「二重性」がおおきなテーマになっている。それはスピヴァクの方法論においても、そこで語られている内容においても同様である。

すでにのべたように、『サバルタン』冒頭では、フーコーとドゥルーズが強く批判されている。その際、スピヴァクの矛先は、まずはフーコーの主張する「異種混合生」をのべるだけでは解決しえない⁽⁶⁾第三世界を搾取したうえになりたつヨーロッパ的な言説的位置どりに向けられるが、理論的には、ルプレザンタシオンというフランス語が、表象と代理という「二重性」をもつことが看過され、いわば政治性を脱色した「表象」という論脈でしかもちいられていないことが焦点化される。それは、サバルタンの声を「誰が代理して」語る権利があるのかが、「語ることができるか」というサバルタンの問いにつきまとうがゆえに、重要な語義の二重性をなす。同様の二重性については「パリンプセスト」[下の文字を消して、上書きをする羊皮紙] (Spivak 1994:76) への言及もあげられる。また「序文」では、同様の機能をもつフロイトの「マジック・メモ」にも論及されている (Spivak 1976:lxvi)。これらは、記憶の「書き換え」が最後でおおきな論点になることからみても重要である。

そうした二重性を論じる際に、スピヴァクはデリダの『散種』に所収された「二重の会」を参照し (Spivak 1994:74)、そうした読みを補強する。この側面についてはのちに詳しくみていくことにする。

さらに『サバルタン』の最後の部分、サティ=寡婦殉死という、夫を失った女性が、夫の火葬の火に飛びこみ自殺する儀礼を分析する場面で、これをイギリス植民地政府が「野蛮な行為」として禁止することを検討する際に、こうした二重性は、錯綜しつつも効果的に提示される。

すなわちスピヴァクはイギリス植民地政府によるこの禁止を、まずは「白人の男性たちが茶色い女性たちを茶色い男性たちから救いだしている」と定式化し、さらに同時にその裏にヒンディ側の「女性は望んで死んでいった」

という言説の構築をみる（二重である）。そしてこの事態に、フロイトの「子供が叩かれている」という論考をあえてかさねて読む（二重に読む）のである。

「白人の男性たちが茶色い女性たちを茶色い男性たちから救いだしている」という言明自体が、相当に複雑な論脈をもつことはいうまでもない。サティの儀礼は女性に対する虐待でもあり、スピヴァクはフェミニストとして、これに賛成するわけではない。そして多くの場合、財産を相続する女性たちが親族によってこの風習で殺される（財産はほかの親族の男性たちに分配される）事実と言及し、サティが殺人行為でありうることを指摘する。しかし同時に、そこで「茶色い女性」を救い出す「白人の男性」たち、すなわちイギリス帝国主義の植民地的「暴力」を裏に秘めた「善き社会」を目指す者たちの行為を、スピヴァクは肯定するわけでもない。こうした点は、一面ではヒンドゥ的な「家長長制」社会の代表者（したがって、西欧フェミニストにとって批判の対象である）マハトマ・ガンジーの、ヨーロッパ植民地主義に対する彼の「無抵抗主義」（断食）に対し、スピヴァクが両義的な姿勢をとることにもかかわる。こうした場面では、一義的には何もいえないのである。

アメリカで学び、同時期の欧米のフェミニズム理論も自らのものとし、ジュディス・バトラーや、のちにニュー・マテリアル・フェミニズムを展開するエリザベス・グロスともかかわりのあった⁽⁷⁾スピヴァクにとって、もちろん欧米のフェミニズムは、インドの女性たちを救うものでもありうる。ただし同時に、そうした思想そのものが「植民地主義のもと」になりたち、インド社会を「野蛮」とする視点に貫かれていることは、インド出身（国籍もインド）のスピヴァクにとって看過できることではない。ポスト・コロニアルの議論の根幹に触れるこの問いを、欧米のフェミニズムやフランス現代思想に通暁し、インド出自でもあるスピヴァクが、いわばもっとも剥きだしかたちで提示したことが、『サバルタン』を現代思想の必読文献たらしめた理由でもある。ここでこの問い自体が、欧米のフェミニズムと植民地主義という「二重性」のさなかにたち現れていることを、まずは確認しておくべきだろう。

3. フロイトと unlearn

さらに考えるべきことは、上記のようなきわめて複雑な対応を迫られる問題に、スピヴァクがフロイトの「子供が叩かれる」という論考をかさねて読むことにある。

フロイトの論考としても有名なこの議論は、男児のみならず女兒の、父親に対するマゾヒズム的欲望を記述したものである。これをサティで亡くなる(殺される)女性の分析にもちこむことは、それ自体相当な危うさを秘めているとおもえる。確かに第二世代以降のフェミニズムは、フロイトをひきついだラカンを基盤に議論をすすめながら、フロイトやラカンの家父長制的・男性中心主義的姿勢について鋭い批判をなしていく。しかしスピヴァクは、フロイトのこの論考を「あえて」そのまま分析に利用しようとする。先にのべたように、これも分析そのものが二重性を帯びてなされることの一例である(ガンジーやヒンディ主義者とフロイトは「二重」にかさなってもいる)。

家父長主義的で男性中心主義的なエクリチュールであるフロイトの議論をとりあげるのは、スピヴァクがそこで提示される「幼児期の記憶」と「神話性」という「二重性」を、サティ自身の分析にとりいれたいからである。そのためにスピヴァクは、ここで **unlearn** = 「忘れ去ってみる」という戦略をとっている⁽⁸⁾。

サバルタンの女性という歴史的に沈黙させられてきた主体に(耳を傾けたり、代わって語るというよりは)語りかける術を学び知ろうと努めるなかで、ポスト・コロニアルの知識人は自ら学び知った女性たちであることの特権をわざと「忘れ去って」みる(**unlearn**)。このように、自ら学び知った特権をわざと忘れ去ってみることは、ポスト・コロニアルの言説をそれが共有しうる最良の道具をもちいて批判するすべを学び知ることこそを意味している……(Spivak 1994:91)。

「忘れ去る」こととは、西欧社会においてフェミニズムを先導してきた、

白人ブルジョワ女性が不可避的にもつ個人主義的な傾向性を多少なりともわかちもち、そうした教育をうけたスピヴァクが、あえてその知識人としての特権性を括弧入れしつつサバルタンについて考えるために必要なことなのである。そこでの *unlearn* にまつわる議論の先に、ついで問題となるデリダの散種 (*dissémination*) の方法 (読解の多義性) が接続されていることも興味深い。しかしここではフロイトに戻ろう。

スピヴァクはサラ・コフマンを引用し、フロイトのテキストは、女性をスケープゴートとし、「娘のしかけてくる誘惑」を語る「男性的—帝国主義的なイデオロギー」に充ちているとのべる。だがフロイトのテキストは、同時に女性のヒステリー患者に声をあたえ、ヒステリー女性の主体化に貢献してもいる (ガンジーの、家父長主義と、植民地主義に対する抵抗の書き換えをなすものという位置どりと同様に)。ここでも問題は「二重」である。そして、そこでフロイトをもちいるスピヴァクは、さまざまな欧米的刷りこみから逃れはしないが、それを「忘れ去ってみる」ことで、フロイトをサバルタン分析に適応させるというのである。

……歴史のなかでサバルタンに声をあたえようという私たちの努力は、フロイトがその言説を繰り広げるなかであえて冒そうとした危険に二重に開かれていることとなるだろう (Spivak 1994:92)。

スピヴァクは、「白人の男性が茶色い女性を茶色い男性から救いだす」という言説とフロイトの言説をアナロジー的にかさねることで、一面ではフロイトの戦略があたえている「アウラ」を「あえて借りる」(Spivak 1994:92) と記していく。そして、その後、フロイトの議論のなかからとりだしうる「二重の起源」を、分析において展開する。

さまざまに錯綜する二重性と、「忘れ去ってみる」*unlearn* という戦略とは関連している。インド生まれでアメリカの大学教員であり、フランス現代思想に通じ、英語で本を執筆するスピヴァクは、自分自身が一筋縄では語りえない多重性のなかにいる。そのなかで、そうした多重性のひとつだけを取りだし、サバルタンという声なき民衆の声という問題に決着をつけることなど不可能である。そうした多重性において、問題はつねに「二重に」設定さ

れるべきなのである。そしてその「二重性」をもちいるとき、スピヴァクはあえてあるひとつの陣営（西洋近代イデオロギー）から語ってしまう知的な「危険」を、「忘れ去ってみる」ことで、何かの書き換えをなそうとするのである。それは、彼女の構想するポスト・コロニアルの思考を展開するギリギリの方法論であるともいえる。

4. デリダのマラルメ 「二重の会」について

ところで、スピヴァク自身のこうした二重性の戦略には、デリダの『散種』とりわけそのなかで示されるマラルメの「黙劇」をあつかった「二重の会」（Derrida 1972:215-349）が、かなりおおきな影響をあたえているとおもわれる。スピヴァクは、この書物の後半部で、それまでのフーコーとドゥルーズへの批判と対比させるように、デリダをより重視すべきという議論を展開するが（Spivak 1994:86ff）、それ以前の段階で、すでにデリダの『散種』を想定した「二重の会」（英語では *double session*）という言葉をはきあいになしている（Spivak 1994:74）（ちなみに、『グラマトロジーについて』の「序文」においても、「二重の会」は数度言及される（Spivak 1976:lxvi, lxxvi）。『サバルタン』での「二重の会」は、まさにこの書物前半のポイントをなす、ルプレザンタシオンの表象（*Darstellung*）と代理（*Vertretung*）の絡みあいの問題にそくして引用されるだけに目をひく。またスピヴァクは、それ以外にも、デリダ由来の用語として *antre* という単語をわざともちいている。それはインドのサバルタンを考えるために、全インド土着の支配者集団とサバルタンの人民の「間」の場所として示される、土着の支配者集団を *antre* という言葉で示し、さらに「状況的非決定性の *antre*」と記述する場面においてである（Spivak 1994:79）。*antre* には「隠れ穴」という邦語が当てられているが、「あいだ」と読むのがすっきりするこの言葉もマラルメに由来する。ここでデリダの「二重の会」というテキストを一瞥しておこう。

デリダの『散種』（1972）は、デリダにとって中期に刊行された書物である。すでに『グラマトロジーについて』（1967）や『声と現象』（1967）などで、現前の形而上学批判やエクリチュールの称揚などの理論的立場を鮮明にしたのちに、デリダは『余白』（1972）、『弔鐘』（1974）を刊行するが、『散

種』はそうした作品群のひとつに位置づけられる。こうした七〇年代のデリダのテキストではエクリチュールの実験的实践という色彩が強くなる。『散種』にも、まずは「書物外」という「序文」ではない序文が付され、「序文」の位置づけがのべられるのだが——もちろんスピヴァクが『グラマトロジー』翻訳の「序文」で強調するように、ヘーゲルの『精神現象学』の「序文」におけるパラドックスともいえる議論を前提にしながら——、その後の章では、パルマコンというギリシア語をめぐり、それがクスリと毒という「二重」の意味をもつことが論じられ、デリダの「二重性」の戦略の源泉となっているともいえる。ここで検討される「二重の会」は、そののちにおかれたものである。

「二重の会」でデリダは、まずはマラルメの「黙劇」の原稿を、プラトンの『ピレボス』でとりかこむ頁と、黒板に書かれたマラルメの文章の断片を記した頁を冒頭で示し、それを解釈しつつ、まさに二重性の問題に踏みこんでいく。「黙劇」や、黒板の字を沈黙して読むこと自身が、沈黙でありつつ上演である（スピヴァク的にいえば、まさに声なきものの上演である）。そしてデリダは、「二重の会」のなかで、**hymen**（処女膜／婚姻）という女性的身体にかかわる境界的二重性を、先にのべたプラトンのパルマコン（クスリ／毒）という二重性にかさねながら記述していく。

スピヴァクが引用する **antre** という言葉も、この書物の冒頭部で提示される（Derrida 1972:223）。そこでは「マラルメの **antre**（ほら穴）、マラルメの **entre**（あいだ）、「マラルメ」という **entre-deux**（中間状態）」と記され、**antre** がほら穴を示しつつも、**entre**=あいだ、**entre-deux**=中間と同じ発音であることが示される。音声において同一であるものになう多義性は、デリダにおいては音声中心主義批判のための言葉遊びの類ともとれるが、ここでは声をあたえることが多義的に分散すること、音声による決定不可能な多義性が強調されるといえる。

ついでデリダは **antre** について、すでに導入した **hymen** の文脈と絡ませ、以下のようにのべていく。

粗布ないし薄布〔ヴェール〕に穴をうがつことなく、干渉縞を引き裂くことはない、マラルメの **antre** ほら穴、彼の語彙集（**glossaire**）の劇場。すなわちこ

うした「宙づり」、「振動する宙づりの状態の中心」、洞穴 (grotte)、声門の内壁の間で生じる語たちの反響においてこそ…… [冒頭で示されたタブローのⅡとⅣが] 響きあうのである (Derrida 1972:259)。

ついでデリダは *antre* の語を、リトレ仏語辞典に掲載されている 1) 洞穴、2) 警察署 (取調室) 3) 解剖学的な骨の窪み (日本語での腔洞) として示し、そのサンスクリット語源としての裂け目や、プロヴァンス語、スペイン語での同系語を示しつつ、それを *hymen* がもつ中間地帯、つまり女性の身体的特徴がもつ両義性にかさねあわせていく (Derrida 1972:261)。つまり *antre* という、スピヴァクが政治的文脈をひきあいにくすデリダの用語は、はじめから女性性と、スピヴァクの表現では×が付されるフェミニスト (cf. Spivak 1976:lxvi) ⁹⁾ の議論とかさなっており、『サバルタン』前半でもちいられるこの語は、最後のインドの女性たちのおかれた具体例の議論を予示するしかけとなっている。

こうした中間性、両義性、二つの矛盾するものの提示が「二重の会」の解説が指し示すことである。*hymen* と *antre* はつねにこうしたむすびつきのもとにある。

覆い隠された隔たり、触れることができず実体をとまわず、狭間におかれた、仲介する隔たりとして、*hymen* のあいだが、スクリーンのなかに反映されるが、スクリーンを突き抜けることはない。*hymen* は *hymen* のなかにとどまる。一方の処女膜 *hymen*——純潔のヴェールもしくは何ものでもない——他方の婚姻 *hymen*——*antre* の消費、消耗、貫通——のなかにとどまる (Derrida 1972:264)。

ここで描かれていることは、隠喩的にも明示的にも、スピヴァクが問題としているサバルタンそのものにも該当する。サバルタンは声なきものであり、それ自身は *hymen* という、白い、何も記されていない、それ自身は何ものでもない対象にはかならない。しかし同時にスピヴァク自身もサバルタンが語りうるのかという問いを発し、そこでの具体的事例に貫通的にはいりこみ、何かの意味をあたえている。サバルタンに声をあたえること自身が暴

力ではないか、それが正当なものかは、スピヴァク自身も「宙づり」にするしかない問題である。hymen は antre とともに、デリダにおいて「パルマコン」「代補」(supplément)「差延」(différance)と同じ「決定不可能な意味価」とであるとされる (Derrida 1972:272)。

ただし、それだけではない。スピヴァクが「二重の会」にこだわるのは、そこでの術語が、あからさまに女性の性的身体を暗示するものであり、まさにサバルタンの女性性について論じることに通じるからである。

マラルメの原文について解釈する紙幅はないが、そこではまずはマイム役者ポール・マルグリットによる『女房殺しのピエロ』という、それ自身きわめてフェミニズム的に解釈可能な作品がとりあげられ、白、空白、襷というマラルメが問題にするものが、「白たちの散種」(Derrida 1972:315)という、それ自身、射精としか読みえないものとかさなることに着目すべきだろう。デリダは「二重の会」の最後の部分で、以下のように記していく。

ヴェール、襷、羽を形成する、必然と偶然の hymen として、しかも、いまだ白紙の詩句による hymen として、エクリチュールは、賽の一振りの精子的放出を、まさに受けとめようとしている。もし——エクリチュールが存在するとしたら、文学は身を持つことだろう——そうした宙づりのなかに (Derrida 1972:344)。

しかし、こう記してしまうことは、まさしく男性中心主義的な hymen の解釈にほかならないのではないか。散種自身がきわめて男性的な射精を暗示するだけのものではないのか。これに対してスピヴァクはデリダ主義者として、これをフェミニスト (×印) 的に読むという姿勢を「序文」において鮮明にしている。

処女膜は、行為をうけつけながら行為するので、もろもろの対立を解体する。この驚くべき処女膜は、hymme、「つねに破られると同時につねに無傷なもの、スクリーン、薄布」のアナグラムでもあるのだが、「征服の確信」を解体する (Spivak 1976:lxvi)。

解釈というつねに無傷でつねに破られた処女膜は、開かれてもあるその褻を通じてつねに代補しているのだが、そのなかへと意味の種子がこぼされる。その種子は受精するよりはむしろ外へと散らばる……デリダは散種 *dissémination* が男性的な行為なのに、フランス語の女性名詞の語“tion”をもつという単純な文法的事実をうまく利用している。つまり“elle”〔彼女〕という代名詞が性的差異を混乱させるのだ (Spivak 1976:lxvi)。

『サバルタン』において、スピヴァクがデリダ自身について語る事が多くはなくとも、そこでスピヴァクはまさしくデリダ的なフェミニスト(×印つき)として振る舞っていることが理解される。そして、「宙づり」の示す「二重性」という、サバルタンに強くかかわる理論的側面だけではなく、女性的身体性を『サバルタン』に導入することが「二重の会」によって確保されるのである。『サバルタン』における *antre* という言葉の政治的場面での利用は、暗に「臆洞」を示すことにより、ただの決定不可能性ではないフェミニズム議論への接続を可能にしている。ここではフランスにおける第二世代フェミニストであるリュス・イリガライの『検視鏡』での女性性をめぐる諸議論(そこでは、デリダがプラトンのパルマケイアーを利用したこととかなるように、プラトンの『ティマイオス』が検討され、女性的身体そのものが問題となる)や、『性的差異のエチカ』で展開される女性の「二つの唇」という、女性の身体性を重視しつつ、男性中心主義的な精神分析に対抗していく論脈とのかかわりが想定されるが、その検討は別の機会に譲りたい⁽¹⁰⁾。

5. フロイトを重ねるサティの読解

上記の「二重性」を念頭においたうえで『サバルタン』の検討に戻ることしよう。この書物のクライマックスといえる場面で、スピヴァクは、こうした二重の読解を、具体的にインドのサティという寡婦殉死の分析と、政治活動家であった若い女性の自殺をとりあげつつ分析する。とりわけ前者には、すでに少し触れたように、フロイトの「子供が叩かれる」の議論が、サ

ティをめぐる植民地状況にかさねあわされる。そこでは、精神分析にもデリダにも通じているスピヴァクが、「忘れ去る」**unlearn** という姿勢をとりつつ、まさに「白人の男性が茶色い女性を茶色い男性から救いだす」という事象を解釈するのである。

そこでスピヴァクは、フロイトにおける「抑圧の歴史」の描き方に着目する (Spivak 1994:92)。すなわち、「子供が叩かれる」における議論設定は「二重の起源」をもち、そのひとつは「いまでは忘れ去られてしまった幼児の記憶」であり、もうひとつは「私たちの太古の記憶」 (Spivak 1994:92) であるとのべられる。ここでも二重性が提示されるが、そうしたフロイト的な歴史の二重の起源が、サティをめぐる言説に適用される。その「二重の起源」については以下のように記されている。

一方はイギリスによる寡婦殉死の習慣の廃止の背後でおこなわれていたもろもろの画策のうちに隠され、もう一方はヒンドゥー・インドの古典的なヴェーダ的な過去、『リグ・ヴェーダ』と『ダルマ・シャーストラ』のうちに宿っている (Spivak 1994:93)。

すなわち、すでに忘却 (あるいは隠蔽) された個々の事例の位相と、そうした個別性を超えた神話的な位相との、「二重の起源」が、サティにおいても探られるべきだということである。

前者は、イギリス植民地主義による、「白人の男性たちが茶色い女性を茶色い男性たちから救いだす」というセンテンスにかかわる。後者は、ヒンドゥーの古典をもちいた、「女性たちは本当に死ぬことを望んでいた」というセンテンスにかかわる。実際にはこの二つの言明は表裏一体であることがスピヴァクによって分析されるのである。

前者の言説を可能にするのは、イギリス植民地経営による「善き社会」の構築する意志にほかならない。スピヴァクは「ほかでもない女性 (今日では「第三世界」の女性) の保護がそういった善き社会の設立のためのシニフィアンになっている」 (Spivak 1994:94) と皮肉をこめて描き、『サバルタン』前半部では批判的に言及したフーコーの「エピステーメー」という「装置」を評価してもいる (Spivak 1994:94)。サティの「儀礼」は、イギリス植民地

支配によって、「犯罪」という別の認識論的（エピステモロジー的）枠組みで理解されるのである。

スピヴァクはさらに「善き社会の確立者という帝国主義的イメージの特徴をなしているのは、女性を彼女自身と同人種の男性から保護すべき客体とみる考え方である」と記し、一見すると善意にみちた植民地主義による現地の野蛮な行為の禁止において、女性は「客体」＝「もの」としてしかとらえられていないとのべる（Spivak 1994:94）。そしてこれとは対照的に、もうひとつの起源、すなわちヒンドゥ的な伝統の起源においては、女性は家父長制のもとで、これも一見すると「主体」化させられるとのべられる（Spivak 1994:94）。それは以下のように展開される。

まず問題は『ダルマ・シャストラ』における「認可された自殺」と「死者の儀礼」にかかわる。一般的にヒンドゥの伝統において自殺は非難されるが、「真理の認識」にかかわる宗教的な自殺は「認可された自殺」とされる。だがその自殺は男性にしか認められておらず、女性は除外されている。

ところが逆に、夫が亡くなったとき、その火葬用の薪のうで自殺をすることは「女性にのみ認可されている」（Spivak 1994:95）。逆説的なことに、この死者にかかわる儀礼において女性が自殺することは「女性的な主体自身によって、寡婦たるべき者の遵守すべき行為の一般的な規則を踏み越えて彼女自身の欲望を表示したひとつの例外的なシニフィアンであるかのように」理解されうるのである（Spivak 1994:96）。

この二つの状況を、スピヴァクは「イデオロギー的な戦場」と記し、のちに論じるジャウハルという、ムスリムに侵入された際の自殺の例をとりあげ、リオタールの *différend*＝「文の抗争」という術語をもちだしもする（Spivak 1994:96）。「善き社会」を形成しようとするイギリス植民地において、サティを禁じることは、ベンガルで財産を相続する「寡婦が残虐な仕方

れ自身は儀礼的伝統のなかでの主体化であり、これを一方的に「犯罪」として、植民地主義的な書き換えをなすことにはやはり異議がとなえられる。何れのイデオロギーが正当であるかは、まさに「抗争」のなかにしかありえない。ただひとついえることは、植民地下における、とりわけ寡婦である女性は、その客体化においても主体化においても、声を発する存在ではないということである。そしてスピヴァクは明確にその狭間を重視し、何れのイデオロギーをもまさに「二重性」における「決定不可能性」においてとらえていく。

6. サティの分析とその先

ここから先の10頁ほどにわたって展開されるスピヴァクのサティ分析における、デリダ譲りともいえる語源的な探索の徹底ぶりは見事としかいいようがない。それによってスピヴァクはヒンディ側の「二重性」を指摘する。

ここでスピヴァクは、ガンジーのサッティヤグラハ＝真理への固執という概念をとりあげ、それは非暴力的（断食）な植民地主義への抵抗により「書きこみなお」されたとのべる。このサッティヤグラハの語の語頭とサティは同じ言葉である（Spivak 1994:98）。スピヴァクはそこで「読者に寡婦殉死とガンディーの抵抗のアウラを比較してみるよう勧めておきたい」（Spivak 1994:98）ともなべる。『ダルマ・シャーストラ』の伝統のなかで、サティは、それそのものとして植民地主義的暴力への抵抗ともつながるのである。

ところが寡婦の自己犠牲にかんする『リグ・ヴェーダ』の記述について、スピヴァクは伝統的になされてきた誤読を指摘する。そこでは「最初に」（*agré*）と書かれているところが「おお火よ」（*agné*）と誤読され、サティの儀礼を補強したと指摘される。それはあたかも歴史的な「夢の解釈」ともいうべきもの、すなわちフロイトが夢のなかでの欲望による語の変形を記述したのとパラレルな事象ととらえられる（Spivak 1994:100）。さらにヨニ（*yoni*）という言葉に、「住居」という解釈を当てるが、これには生殖器というという意味が（とくに女性のではないにしても）隠れている。それゆえそこでは「膺と火のイメージ的なつながり」（Spivak 1994:100）が、誤読を

通してサティの論理をさらに強固にしたとされる。この部分はデリダの「二重の会」の読解を、スピヴァクがインドという植民地での多層性において実践したものといえるだろう。

そして最後に *sati* という言葉自身が *sat* の女性形であるが、それは「ある」という動詞の現在分詞形であり、ハイデガー的な *Sein* と同じであるとのべられる (Spivak 1994:101)。そして今日、サティはたんに「良き妻」という意味をもち、ヒンドゥ社会における、女性の良き生にむすびつけられるのである。

そのあいだにも、女性の欲望による「主体化」をめぐるサティの議論に、スピヴァクはさまざまな注釈を付していく。寡婦殉死の例外的規定についていえば、ヒンドゥ側でもイギリス側でも議論がなされるが、そこでの「性別化されたイデオロギーの規定」についてはヒンドゥのあいだでも、イギリスとヒンドゥのあいだでも何も論じられていない (Spivak 1994:98)。また議論の途中で、先に少しのべたジャウハルというムスリムの侵略行為における女性へのレイプを防ぐための自殺が同じく検討される。スピヴァクは当然戦時のレイプを非難するが、ジャウハルが「愛国物語」のなかで美談として語られることは、同時にレイプを「自然な行為」として正当化するだけだとのべる。それはサティとつながるイデオロギー再生産装置となり、そこでの「性別化された主体」には、サティという（あるいはジャウハルという）目に見える暴力によって、主体化がかき消されてしまうと指摘される (Spivak 1994:99)。

結論としてスピヴァクは、「善き社会」を形成するイギリス側の女性の客体化の構成作業の裏側で、女性的な主体を自らが主体的に選びとった死において構成するヒンディ側の操作が同時進行していたとのべる (Spivak 1994:101)。結局そこでは「家父長制と帝国主義、主体の構築と客体の形成の狭間であって、女性の像は、原初の無へとではなくて、あるひとつの暴力的な往還のなかへと消えていく。その往還こそは伝統と近代化の狭間であってとらえられた「第三世界の女性」の置き換えられた形象 (displaced figuration)」であると記述される (Spivak 1994:102)。

ある意味で「サバルタンの女性」において救いのない状況の露呈が、そうしたサバルタンを代弁し／かつ代弁不可能である女性（インド出身のアメリカの大学教授）によってなされる。そこでは *unlearn* のもとにおけるフロ

イト的な読解が、デリダ的な「二重性」が、そして重層決定という、ここでは明示されないものの、アルチュセールの議論が効いてくる。そこで「サバルタン女性」の「主体化」も、それを「客体化」するだけの植民地主義暴力とのあいだにおける「置き換えられた形象」としてしか示しえない。それは絶望なのだろうか。

スピヴァクは、実際半分はそうとらえているだろう。「サバルタンは語るができない」といったんは断言するスピヴァクは、そうした女性の客体／主体は、「置き換えられた形象」と、それを生み出す重層的な言説の錯綜のなかで提示されるよりほかはないと考えるだろう。一面ではイギリス植民地主義は、女性を殺戮から救ったし、ヒンドゥの伝統は女性を「主体化」してもいる。しかしそこに「サバルタン女性の声」はない。

とはいえ、こうした状況に何かの介入的実践 (interventionist practice) はなしえないのだろうか。政治的任務をおった女性の自殺の例は、スピヴァクによるそうした実践の可能性の探究である。

7. 介入的実践の可能性

『サバルタン』を終えるに際して、スピヴァクは政治的な暗殺の使命を託された一六―一七歳の女性の自殺を検討している。ポイントは彼女が「生理中」に自殺をしたことにある。それは、この自殺が不貞な男女関係の結果や、望まない妊娠の帰結であると解釈されることを避ける意味をもつ。スピヴァクは、そこで「良き妻になることを待ち望むブラフマチャーリーニー [結婚前の処女] のひとり」が、「サティについての社会的コンテクストをある介入主義的なやり方で書きなおした」(Spivak 1994:101) とのべる。この女性は、周囲からは、婚期が遅れてうつ状態であったとか、許されざる恋愛のために自殺したとしか「証言」されない。しかしスピヴァクは、この行為は、サティという合法的な婚姻における自殺と、そこにおいても生理中の自殺は停止されるという事柄をすべて意図的に裏切るという意味で、「目立たない、その場かぎりで、サバルタンの書きなおし」であるとし、同時にそれが「烈火のように激怒して闘う母ドゥルガーについてのヘゲモニー的な言説のサバルタンの書きなおし」でもあるととらえていく (Spivak 1994:104)。

ドゥルガーの形象は植民地主義的な闘いのさまざまな記憶のなかにあり（まさに戦闘する女性の形象であるだろう）、その一ヴァージョンをこの女性は、自己の声なき主体的行為において実践したというのである。

ひとりのサバルタンであり、声を残していない、しかし生理という女性的身体性においてはたされるこの「抵抗」が、帝国主義的な植民地主義と、家父長的伝統の、いまだに残存する「あいだ」において、どの程度の効果をもつかについては考えてしまうものがある。とはいえスピヴァクはそこにも、神話的伝統の継承的書き換えと、植民地主義的抵抗の「二重性」をみてとり、まさにデリダ的な、つまりは *hymen* を論じるデリダのマラルメの議論をかさねながら（しかしそのことは明示せず）記述していく。それは起源におけるカタクレシス（濫喩）を生みだすとともに、いずれかに決着をつけるユートピア的欲望に対し、「私たちのなかの他者の声である内なる声にうわごとをいわせる」ことによる書きなおしでもあるというのである（Spivak 1994:104）。だがそこにも、サバルタンの女性の声はない。私たちはそこで、デリダ的二重性と、フロイト的神話性の読みを *unlearn* にひきうけたヒンドゥの読解をもってしか、サバルタンを論じえない。

少なくとも以上の考察において、スピヴァクの議論が、マルクス主義やグラムシの議論を背景としつつも、フランス現代思想と、インドの神話の読解という重層性においてなされていること、そしてデリダ的な戦略は結局のところ「決定不可能」な領域に私たちをおくが、そこでの「形象」の「置き換え可能性」にスピヴァクは希望をみいだしていることは提示しえたとおもう。『サバルタン』読解の最後の困難さは、こうした「介入主義的实践」を「知識人」に（スピヴァクは欧米の女性知識人に）課していることであり、それはまた、日本語でこの論考を執筆している筆者に対してもいえることだろう。近代的植民地主義の諸行為と、そこでサバルタンたちが数百年以上の長さで関与していた文化的古層とを、まさに重層的にとらえることなくして、その責務は務まらない。これは『サバルタン』を読む者（読みうる知的なもの）すべてに向けられた、デリダ的な「二重性」による書物的実践の優れた実例であるともいえるだろう。

注

- (1) 本稿は、もともと「大阪大学グローバルヴィレッジ」のポスターをきっかけとして、2020年9月に、当時助教であった宮前良平が提起し、当時学部3回生である藤阪希海によってはじめられた読書会に、桂や檜垣も参加し、当初の予定をこえて一年半つづけられたスピヴァク読書会（その発端については宮前・藤阪・上總・桂 2022 の 1.1 を参照のこと）の成果のひとつであり、先に桂と筆者で発表した共著論考（桂・檜垣 2022）所収の、筆者執筆部分の続編と位置づけられる。この読書会は現在でも、テキストをスピヴァクの『ポストコロニアル理性批判』に移してつづけられている。この読書会での読解より筆者は多くのアイデアをえている。それにかかわってくれている何人もの大学院生・学部生に感謝します。
- (2) 宮原（2010）を参照のこと。デリダ、バトラー、スピヴァクがアメリカ読書会でも「悪文」の書き手と評されていたことも、その冒頭で詳細に論じられている。
- (3) グラムシのサルタン概念については、片桐（2001）や、グラムシ（2011）を参照のこと。
- (4) 今回、『サルタン』の原文参照について、当初の上村訳（*Marxism and the Interpretation of Culture*, Urbana, University of Illinois Press.1988）の初出と違う版を参照したため、この序文に該当する部分は掲載されていなかった。なお『サルタン』には単行本化されたものがあるが、（とくに冒頭に）書き換えがなされている。
- (5) グハラ（1998）を参照のこと。
- (6) ただし異種混交性という事態をスピヴァクが評価していないわけではない（たとえば（Spivak 1994:79,93）。後者はサティの分析に直接かかわるだけに重要である）。またドゥルーズについても、ドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』を条件つきで評価するだけではなく（Spivak 1994:74）、『ポストコロニアル理性批判』においてはむしろ積極的な役割をあたえ（Spivak 1999:103-109）、逆にデリダに対して、そのヨーロッパ人であることの意識にかんして相当辛辣な批判をおこなっている（Cf. Spivak 1994:17-18 note 29）。
- (7) グロスのスピヴァクへのインタビューは 1985 年に刊行されている。Spivak & Grosz（1985）を参照のこと。
- (8) 「忘れ去ってみる」という主題については『サルタン』の解説において訳者の上村も注目している（上村 1998:139ff.）。またこのテーマの重要性については、読書会において、桂悠介から教示をえた。
- (9) これはもちろん、後期ハイデガーが存在 Sein という言葉に×をつけることによって提示し、それを一存在者として描かないことに倣ったものである。植民地におけるサルタンの女性がかかえる重層性を問題とするスピヴァクにとって、一枚岩のフェミニストなる者は存在せず、むしろフェミニズムはつねに多重的な揺れの途上にあることを示唆している。
- (10) イリガライについては檜垣（2023）第三章「イリガライとバトラー 身体の物質性というリミット」を参照されたい。スピヴァクのフェミニズムは、もちろん

んバトラーと関連しながらも、より女性の身体性そのものの濫喩的でかつ生々しい着目がかいまみられ、やはり濫喩を多用するイリガライの議論とのかかわりも無視できないとおもわれる。第二世代フェミニストが、ジュリア・クリステヴァのブルガリアや、イリガライのベルギーなど、フランス／ラテン語圏であるとはいえ、中心ではない周縁から現れたことも示唆的におもわれる（グラムシがイタリア南北問題から「サバルタン」を考えたように）。

参考文献

- Derrida, Jacques. 1972. *La dissémination*. Paris: Seuil.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. 1976. Translator's Preface, in Jacques Derrida, *Of Grammatology*, pp. ix- lxxxvii. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- . 1994 [1988]. *Can the Subaltern Speak?*. in *Colonial Discourse and Post-Colonial Theory*. Patrick Williams & Laura Chrisman (eds.), pp. 90-105. London: Routledge.
- . 1999. *A Critique of Postcolonial Reason*, Harvard University Press.
- Spivak, G.C. & Grosz, E. 1985. Criticism, Feminism and the Institution, in *Thesis Eleven: Critical Theory and Historical Sociology* 10-11(1):175-187.
- 上村 忠男 1998 「訳者あとがき」『サバルタンは語ることができるか』みすず書房。
- 片桐 薫（編）2001 『グラムシ・セレクション』、平凡社。
- 桂 悠介・檜垣 立哉 2022 「『サバルタンは語るすることができるか』を読み直すために——共生のフィロソフィーの視点から」『共生学ジャーナル』6:1-22。
- グハ、ラナジット・パーンデー、ギャーネンドラ・チャタジー、パルタ・スピヴァク、ガヤトリ 1998 『サバルタンの歴史 インド史の脱構築』竹中 千春訳、岩波書店。
- グラムシ、アントニオ 2011 『「歴史の周辺にて サバルタンノート注解（グラムシ獄中ノート）著作集VII』松田 博編訳、明石書店。
- 檜垣 立哉 2023 『生命と身体 フランス哲学論集』勁草書房。
- 宮原 一成 2010 「スピヴァクは読まれることができていたのか——特に日本において」『英語と英米文学』45:103-127。
- 宮前 良平・藤阪 希海・上總 藍・桂 悠介 2022 「『サバルタンは語るすることができるか』を共に読み共に書く 共生学の3つのアスペクトを中心に」『未来共創』9:243-274。